明治大学教育会主催　COVID-19 関連 ZOOM 企画

コロナ禍における学生，生徒の心理

伊藤　直樹（明治大学文学部）

1.　はじめに

本稿は，2021 年 8 月 24 日に開催された明治大学教育会主催講演会，COVID-19 関連 ZOOM 企画『コロナ禍における学生，生徒の心理』の内容を本紀要掲載のためにまとめなおしたものである。

明治大学では，2020 年 4 月の緊急事態宣言の発出を機に入構制限が実施され，授業の大半がオンラインとなり，教育活動が大きく制限されることとなった。コロナの感染拡大状況に応じて，こうした制限が一時的に緩和されることはあったものの，学生がキャンパスにおける対面の授業に出席する機会は大きく減少し，また，課外活動等の活動の多くが制限され，あるいは，縮小されたり，中止されたりした。

初等・中等教育段階の学校もその教育活動が大きく制限を受けたのは同様であるが，全国的な休校措置が解除された後，分散登校などを経て，比較的早い段階で平常に近い教育活動を取り戻すことができており，その意味では大学ほど大きな影響を受けた学校はないといえよう。しかし，コロナ禍により，大学生が受けた影響については，報道等により断片的に伝えられる大学生の姿や各大学が個別に行うアンケート調査等からうかがい知ることができる情報以外には基本的な情報に乏しいのが現状である。

本講演では，コロナ禍において大学生が受けた影響について，心理学におけるこれまでの研究の知見から考えられること，および，筆者が明治大学の教職課程を履修する学生を対象にして行った 2 回のアンケート調査の結果をもとに考察を試みた。その際，大学生が受けたと考えられる影響から，コロナ禍を経験した子どもたちが受けた影響についても予測し，学校が今後，教育活動を続ける際の留意点について提言を試みた。

2.　発達心理学的な観点から見た子どもの成長

まず，発達心理学的な観点から，今回のコロナ禍が子どもたちの心身の発達に与える影響について考えてみたい。発達心理学者の藤永(2007)による「隔離されて育てられた子どもの成長」に関する研究の一部を紹介しよう。それによれば，1972　年，6 歳と 5 歳のふたりの子ども（姉弟）が 1 年半にわたり戸外の小屋に放置されていたのがみつかり救出された。ふたりの身長は 80 センチ，体重は 8 キロ，姉は 3～5 語，弟はゼロ語しか話せなかった。その後，彼らは十分なケアを受け順調に成長し，自立した家庭人・社会人として暮した。しかし，身体的には平均以下，ＩＱは 80 程度であったとされている。

藤永はこの研究などをもとに，発達における「可塑性」と「臨界期（敏感期)」という考え方について述べている。「可塑性」とは，人間の発達には柔軟性があることを示す考え方

であり，「臨界期（敏感期）」とは，人間の発達には効率よく進む時期とそうでない時期があることを示す考え方である。また，十分な環境を与えられなかった子どもが，その後，環境が整うと，遅れていた成長を一気に取り戻す現象が知られているが，これを「catch-up growth」とよんでいる。

今回のコロナ禍では，多くの子どもが学校での教育の機会を奪われるか，大きく制限された。これにより子どもたちの心身の成長が少なからず遅れたと考えられるが，一方で，発達には可塑性があると考えられるため，その後の教育環境の整備により，この遅れは補われ，また，場合によっては，遅れを取り戻すかのように成長を取り戻す（catch-up growth）ことも考えられる。しかし、これはその後の教育環境が整った場合ということであり，当然のことながら，教育環境の整備に時間がかかればかかるほど遅れも大きくなり，それを取り戻すことが難しくなることになる。また，それぞれの学校段階において修得が必要な内容には，その学校段階でないと修得しにくいものもある（臨界期（敏感期））。たとえば，中学生の友人関係にはその時期固有の特徴があり，それを大学生の段階で経験することは難しい。今回のコロナ禍は，こうした発達における時期の適切性にも影響を及ぼすと考えられる。

3. 臨床心理学的な観点から見た心の成長

エリクソン(1989)は，青年期の発達課題としてアイデンティティの確立をあげた。周知のことであろうが，青年期はアイデンティティ形成の重要な時期であり，中学，高校，大学といった各学校段階において，子どもたちは自らのアイデンティティ形成の作業を徐々に進めていく。このアイデンティティには，①自己の斉一性（この自分はまぎれもない自分であって，いかなる状況においても同じその人であると他者からも認められ，自分でも認めること），②時間的な連続性と一貫性（以前の自分も今の自分も一貫して同じ自分であると自覚すること），③帰属性（自分はなんらかの社会集団に所属し，そこに一体感をもつとともに，他の成員からも是認されていること）の 3 つの要件があるとされている。

今回のコロナ禍においては，③の「帰属性」が大きな影響を受けたことが予想される。明治大学は約 1 年半（講演会開催時）に渡り，対面の授業がほとんど行われず，特に，1 年生は入学してもキャンパスにすらほとんど入構できないという事態となった。授業だけでなく，キャンパスにおいて友達と対面で交流する機会もほとんどなくなってしまったため，これまでの学生と比較すると，彼らは大学に所属しているという感覚をほとんど持てていないと考えられる。このことが彼らのアイデンティティの形成に大きな影響を及ぼすのは間違いないであろう。

4. コロナ禍における大学生の状況に関するアンケート調査

次に，コロナ禍が大学生の生活と心理にどのような影響を与えているかに関する基礎的な知見を得ることを目的とし，筆者が明治大学の教職課程を履修している学生を対象に 2 回にわたって行ったアンケート調査の結果を紹介する。調査対象者は明治大学の教職課程の学生に限られ，また，学年別の人数にも大きな偏りがあり，回答した学生数も決して多くは

ないが，これらの調査の結果を分析することにより，学生が現在，経験していることの一端をうかがい知ることができるだろう。調査の概要は以下の通りである。なお，本稿においては紙幅の都合上，アンケート結果の一部を抜粋して掲載する。

(1) 【第１回調査】「コロナ禍前後における大学生の生活の変化に関するアンケート」

① 調査期間：2021 年 1 月 13 日～1 月 20 日

② 調査方法：明治大学の Oh-o! Meiji システム（インターネットを利用した情報配信システム）に Google フォームにより作成された多肢選択式を中心としたアンケートフォームのＵＲＬを掲載し，履修学生にアンケート調査への協力を呼びかけた。

③ 調査対象：教職課程を履修している学生 260 人

④ 調査協力者：62 人（回答率 23.8%）

⑤ 回答者の内訳：1 年生（8 人），2 年生（43 人），3 年生（7 人），4 年生（4 人）

(2) 【第２回調査】「長期化するコロナ禍における生活の変化に関するアンケート」

① 調査期間：2021 年 7 月 16 日～7 月 30 日

② 調査方法：第 1 回調査と同様

③ 調査対象：教職課程を履修している学生 172 人

④ 調査協力者：95 人（回答率 55.2%）

⑤ 回答者の内訳：1 年生（25 人），2 年生（40 人），3 年生（24 人），4 年生（6 人）

(3) 調査の結果および若干の考察

① コロナ禍が教職への志望度に与えた影響

図 1 は第 2 回調査における教職への志望度をまとめたものである。およそ 6 人に 1 人が教職に「とても就きたい」と思っており，3 人に 1 人強が「やや就きたい」と思っていることから，将来の進路として教職に関心を持っている学生は決して少なくないことが示唆される。

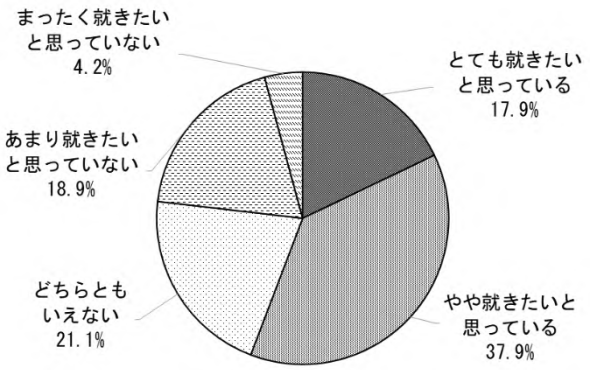

図1　教職への志望度（第2回調査）

また，表 1 は，「とても就きたいと思っている」と回答した学生 17 人のコロナ禍前後における教職への志望度の変化をまとめたものである。これを見ると，教職への志望度が高い学生のほとんどは，コロナ禍前後においても教職への志望度に変化は見られないことがわかる。

表 1 「とても就きたいと思っている」と回答した学生 17 人のコロナ禍前後の比較の回答の内訳

選択肢	人数
教職に就きたいという思いに変化はない	16
教職に就きたいという思いが強くなった	0
教職に就きたいという思いが弱くなった	0
教職に就くことに迷うようになった	0
その他	1
計	17

図 2 は，第 2 回調査における「今，不

安に感じていること」（複数選択）の回答をまとめたものである。「教育実習のこと」は 49 人（51.6%）の学生が選択しており，コロナ禍が継続することにより，教育実習を行えるかどうかについて不安を感じている学生が多いことがうかがえる。

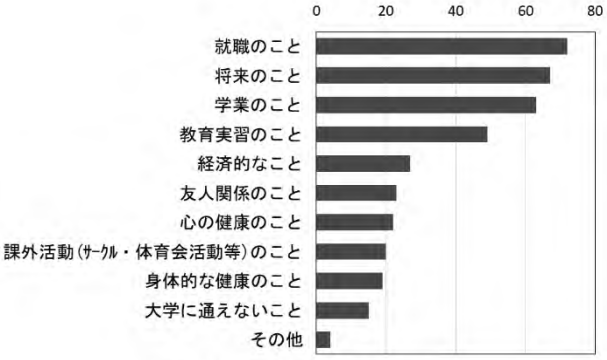

図2　今，不安に思っていること

② コロナ禍の長期化が心身に与えた影響

アンケートでは，肯定的な感情として「物事に意欲的に取り組むこと」，「充実していると感じること」，「楽しいと感じること」，否定的な感情として「気分が落ち込むこと」，「悲観的になること」，「気分が不安定になること」，「孤独感を覚えること」についてたずねたが，本稿では，そのうち，「楽しいと感じること」，「気分が落ち込むこと」，「孤独感を覚えること」についての第 1 回調査と第 2 回調査の結果の比較を紹介する。

「楽しいと感じること」（図 3）では，「とても減った」と「やや減った」を合わせた「減った群」がわずかに増えているのに対し，「とても増えた」と「やや増えた」を合わせた「増えた群」は若干減少している。微妙な差異であるので断定的な解釈はできないが，少なくとも，学生にとっては「楽しい」経験は増加しておらず，むしろ全体的に若干減少している可能性があることも予想される。

図3　楽しいと感じること

「気分が落ち込むこと」（図 4）では，「とても減った」と「やや減った」を合わせた「減った群」が増えているのに対し，「とても増えた」と「やや増えた」を合わせた「増えた群」は減少している。「気分の落ち込み」については改善されている可能性が考えられるものの，「とても増えた」が若干増加していることから，状況を楽観視することはできないことが示唆される。

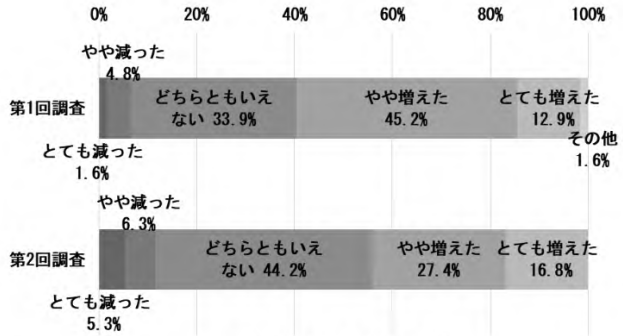

図4　気分が落ち込むこと

最後に「孤独感を覚えること」では，「とても減った」と「やや減った」を合わせた「減った群」が減少しているのに対し，「とても増えた」と「やや増えた」を合わせた「増えた群」は若干増加している（図 5）。

すなわち，学生が抱く孤独感については改善されておらず，どちらかといえば，悪化していることすら予想される。青年期におけるアイデンティティ形成の要件において「帰属性」をあげたが，その観点からすると，大学生のアイデンティティ形成の状況が危惧されるところである。

図5　孤独感を覚えること

③　第１回・第２回調査における精神的不調の指標の比較

２回にわたる調査において，大学生の心理的状態がやや改善されている面（本稿には取りあげていない調査項目の結果から，これには「コロナ慣れ」が関係していることも考えられる。）と十分に改善されているとはいいがたい面がある可能性が示唆された。そこで，さらに大学生の状況を細かく捉えるために，アンケートにおいて否定的な感情としてたずねた「気分が落ち込むこと」,「悲観的になること」,「気分が不安定になること」,「孤独感を覚えること」の４項目のうち，２つの項目に対して「とても増えた」ないし「やや増えた」と回答した場合を精神的不調の状態を表す指標と考えることとし，該当する学生数を算出した（表 2)。

この表から，２つの項目に「とても増えた」ないし「やや増えた」を選択した学生は平均すると 38.2%（第１回調査）から 29.5%（第２回調査）に減少していることがわかる。一方，２つの項目とも「とても増えた」を選択した学生は平均すると 5.8%（第１回調査）から 8.7%（第２回調査）に増加していることがわかる。すなわち，より精神的不調の程度が重い学生は増加傾向にある可能性が示唆される。

表２　第１回・第２回調査における精神的不調の指標の比較

		「とても増えた」ないし「やや増えた」を選択した学生				ともに「とても増えた」を選択した学生			
		第１回調査		第２回調査		第１回調査		第２回調査	
精神的不調の組み合わせ		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
気分が落ち込むこと	悲観的になること	28	45.2%	32	33.7%	2	3.2%	8	8.4%
気分が落ち込むこと	イライラすること	23	37.1%	24	25.3%	4	6.5%	6	6.3%
気分が落ち込むこと	気分が不安定になること	28	45.2%	29	30.5%	4	6.5%	14	14.7%
気分が落ち込むこと	孤独感を覚えること	27	43.5%	31	32.6%	4	6.5%	7	7.4%
悲観的になること	イライラすること	20	32.3%	23	24.2%	3	4.8%	6	6.3%
悲観的になること	気分が不安定になること	25	40.3%	30	31.6%	3	4.8%	11	11.6%
悲観的になること	孤独感を覚えること	23	37.1%	29	30.5%	3	4.8%	8	8.4%
イライラすること	気分が不安定になること	22	35.5%	28	29.5%	4	6.5%	8	8.4%
イライラすること	孤独感を覚えること	18	29.0%	24	25.3%	5	8.1%	4	4.2%
気分が不安定になること	孤独感を覚えること	23	37.1%	30	31.6%	4	6.5%	11	11.6%
平均		23.7	38.2%	28	29.5%	3.6	5.8%	8.3	8.7%

5.　まとめ

(1) 大学生を対象とした調査の結果から

本稿に取りあげていない調査結果もあわせて考えると，第 1 回調査時から第 2 回調査時の時期にかけて，全体的には，多くの学生の心の健康はやや回復傾向にある，ないし，悪化はしていないものの改善もしていないと見ることができた。しかし，一部の学生は心の健康について課題を抱えており，そうした学生は増える傾向にある可能性も示唆された。今後もコロナ禍の長期化が続けば，課題を抱えた学生ほど心の健康状態がさらに悪化することも考えられる。また，こうした点は，対面の授業が再開された際に登校を開始した多くの学生の健康的な姿に隠れ，見えにくくなる可能性がある。特に，学生の感じている「所属感」，「孤独感」，さらには，そのことによってもたらされる「人と人とのつながりの不足」の影響については注視していく必要があるだろう。

(2) 中学生・高校生への視点

筆者は都内の公立中学校において，特別支援教育に関する巡回アドバイザーの仕事も行っている。その経験に限定される印象であるが，中学校は大学よりも休校期間が短かった分，その直接的な影響は大学より小さいように感じられる。しかし，中学校における印象を高校にまで広げて考えると，中学生・高校生は大学生よりも心身の成長が急速に進む時期であることから，その影響を軽視することはできないだろう。今回の大学生を対象とした調査結果等から類推すれば，コロナ禍の長期化がさらに続けば，課題を抱える生徒ほど、その深刻度が増す可能性や，学校が平常化されればされるほど，そのことが見えにくくなる可能性が考えられよう。

厚生労働省自殺対策推進室・警察庁生活安全局生活安全企画課(2021)による「年齢階級別自殺者数の年次推移」を見ると，2020 年は前年に比べて，自殺者数全体が 8.1%増となっているが，その増加率は 10 歳～19 歳が 17.9%増，20 歳～29 歳が 19.1%増と，他の年齢階級に比べて突出している。また，朝日新聞(2021 年 8 月 20 日付け)の報道によれば，2021 年 1 月～6 月に自殺した小・中・高校生は 234 人となっており，小・中・高校生の自殺が過去最多(499 人）にのぼった 2020 年の同期間の 203 人を超える人数であったとされている(伊藤，2021)。こうしたことからも，コロナ禍が大学生や子どもたちの心の健康に与える影響は大きく，また，その状況が見えにくいという特徴があることが考えられる。学校教育関係者は，こうした点に十分注意する必要があるだろう。

引用文献・資料

エリクソン，Ｅ．Ｈ．著，村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）　(1989)．　ライフサイクル，その完結　みすず書房

藤永保　(2007)．養育放棄のもたらす発達遅滞とそこからの回復　公益財団法人成長科学協会第 20 回公開シンポジウム　子どもの成長・発達と環境の影響
http://www.fgs.or.jp/pdf/05_symposium/03_2001-2010/02_outline/186_outline_20.pdf

(2021 年 1 月 22 日閲覧)
厚生労働省自殺対策推進室・警察庁生活安全局生活安全企画課　(2021).　令和２年中における自殺の状況　警察庁ウェブサイト　https://www.mhlw.go.jp/content/R2kakutei-01.pdf　(2021 年 11 月 24 日閲覧)
伊藤和行　(2021).「学校行きたくない」は SOS　小中高生自殺最悪ペース　朝日新聞 (2021 年 8 月 20 日), 朝刊, p.29

「コロナ禍における学生、生徒の心理」感想

明治大学教育会長　田中　徹太郎

東日本大震災時、石巻日々新聞社の報道部長武内宏之氏は、手書きの壁新聞で情報を市民に伝えた。武内氏は、「目に見える復興：再建」「目に見えない復興：心の復興」の両輪が実現されてこそ「真の復興あり」と主張されている。伊藤直樹先生は、コロナ禍においても「心の復興」への営みが、通底するテーマであると臨床心理学、発達心理学の知見より講演された。リモート授業中心の大学生活で希薄になる帰属性から生ずるアイデンティティ形成の遅れ。孤独感、不安を開示できない深刻な学生の増加。対面授業再開の喜びや明るさの中で課題を抱えている学生が見えにくくなる現状。中高生にも同様の傾向があり、現場では、「活動再開」「行動制限」の両方にアクセルを踏む二重性から生じる混乱があるようだ。伊藤先生のアンケートを元にした精緻な分析は、周囲に埋もれがちな「生き辛さを抱える深刻な人」を浮き彫りにしている。心理学の領域では、現在オンラインカウンセリングにより、糸口を探る試みが模索されている。

指定討論者として発言してくださった高木清香先生の事例研究は、担任、保護者、カウンセラーの誠意に満ちた対応が児童の心の復興を実現させた示唆に富んだ内容であった。人と人の繋がりが児童の心を突き動かしたのである。ご参加の現場の先生からは、生徒同士の密の度合いは、なかなか制御不能であり、特に夏期休暇中は、部活、グループ学習でより密の度合いが強くなったとの事。生徒の適応力は高いが、マスクで表情の変化がわからず、見えないストレスを抱えている生徒の把握が難しいこと。分散登校は、適合する生徒と合わない生徒がおり、また、中学校では、学習習慣や生活習慣のレベルが下がり、コミュニケーションのトラブルが増えた事や、個々の SOS を感知するには、日々の信頼感の醸成が大切などの意見が述べられた。学生からは、高校時代オンライン授業で丁寧な教師に恵まれ、相談にも真摯にズームで答えてくれたとの感想や自らの SOS を出せない、カウンセラー相談を忌避する生徒をどうしたら人の繋がりの中で育んでいけるのかという発言もあった。藤本先生は、生徒の不安や心配を受容し、大人も同じで君だけが特別ではないとの大きく包み込む豊かな対応を提案されていた。

コロナ禍の特殊な状況ではあるが、教育の原点に立ち戻るなら、生徒、学生の揺れ動く内面に真摯に向き合うことは、どんな状況であっても教育者にとって極めて重要な使命であろう。

教師とて、生徒、学生と同じ人生のプレイヤーである。自らを真摯に見つめ直し、貪瞋痴を抱えた凡夫である自覚が立脚地かも知れない。